

## 『証言が示すもの』 ヨハネ31:23-25

21:23 こういうわけで、この弟子は死ぬことがないといううわさが、兄弟たちの間にひろまった。しかし、イエスは彼が死ぬことはないと言われたのではなく、ただ「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか」と言われただけである。

21:24 これらの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、この弟子である。そして彼のあかしが真実であることを、わたしたちは知っている。

21:25 イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。

### ●序論

ヨハネ自身に関する言葉が記されています。

21:23 こういうわけで、この弟子は死ぬことがないといううわさが、兄弟たちの間にひろまった。

先週の最後に見たイエスさまの言葉きっかけで、兄弟たちの間に（つまり仲間たちの間に）、「ヨハネは死なない」という勝手なうわさが広まっていた…ということです。そこでヨハネは先ほどの続きでこう書いています。

:23…しかし、イエスは彼が死ぬことはないと言われたのではなく、ただ「たとい、わたしの来る時まで彼が生き残っていることを、わたしが望んだとしても、あなたにはなんの係わりがあるか」と言われただけである。

ここでヨハネは、自分自身についての誤解を正しながら、その話題をきっかけにして、むしろ、イエスさまに注目するように語りかけています。

ヨハネが改めて伝えるのは、「イエスがどんなお方であり、何を示されたか」ということでした。それが再度強調されているのです。

改めて、ヨハネは21章を語ることを通して、当時の多くの迫害や困難に直面して弱さを抱え、また涙するような経験をしていた人々が、赦しと回復の希望、慰めと励まし、そして変わることなく立つイエス・キリストの恵みの真実を知ること、受け取ること、そして信じて回復されることを示しています。

だからこそ、改めてこの書の目的を示した20章31節の言葉が生きます。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

### ●本論

I. これは目撃者の証言です

:24 これらの事についてあかしをし、またこれらの事を書いたのは、この弟子である。そして彼のあかしが真実であることを、わたしたちは知っている。

ここで「この弟子」とは、イエスが愛された弟子とあるヨハネ自身を指します。

- 最後の晩餐の席でイエスの胸もとに寄りかかった弟子
- 十字架の下でイエスの母マリアを託された弟子、
- 復活の朝に墓に駆けつけ、「見て信じた」弟子
- ガリラヤ湖の岸辺に立つ方を「主だ」と最初に気づいた人でした。

ヨハネはここで、自分の証言が「真実である」と強調します。

それは、実際にその目で見て、聞いて、触れた現実を証言しているからです。

それは、ヨハネの執筆スタンスでした。彼の手紙でも同様です。

1ヨハネ1:1-2 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目を見たもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言（イエス）について——このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。

その上で、今日「わたしたちは知っている」という言葉が添えられます。

この「わたしたち」とは、ヨハネの証言を受け継いだ初代教会の人々、そして今この福音書を手にしている私たち自身も含まれます。

つまり、これは単なる記録の保証ではなく、「信仰告白」です。

「この証言は真実である」と私たちも、心を重ねて告白するように導かれています。

ヨハネの証言が示すイエスさまは、今も生きておられる神の御子として、私たちに命を与えてくださるお方です。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。（ヨハネ3:16）

イエスさまの言葉や奇跡を通して「神さまの愛」が形となって現わされてきました。

盲人の目を開かれるときも、死んだラザロをよみがえらせるときも、そして十字架の上で「成し遂げられた」と叫ばれたその瞬間も。

※すべては、神がどれほど人を愛しておられるかを示すための証言だったのです。

## Ⅱ. 語り尽くせない真実です

ヨハネはこう結びます。

21:25 イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う。

ヨハネが見たイエスの歩みは、それほどに豊かで、限りのないものでした。

そして、彼の生涯の一つひとつの出来事は、神の愛のしるしでした。

それは、人間の言葉では語り尽くせないということです。

紙にも、時間にも、人生にも収まりきれないほどの愛。それが、ヨハネがこの結

びで見上げている「神の愛」です。

彼が書き記したのも、ほんの一部にすぎません。

だからこそ、その証言をもってイエスさまご自身に目を向けるように示します。

彼は、イエスさまにこそ、すべてが満ちていると証言するのです。

ヨハネ1:14 そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、めぐみとまこととに満ちていた。

ヨハネはイエスさまの偉人伝、伝記を残すことを目的としたわけではありません。

読む人がイエスさまと出会い、信じて、滅びから救われるための「福音書」として記しているのです。

ヨハネは気づきを促します。あなたのためにこの奇蹟がある。あなたのためにこの御言葉がある。あなたのために、イエスさまは語り、あなたの救いのためにイエスさまは死なれたのだと。だから信じてほしい。信じて罪と滅びから救われて、命を得てほしいと。

だから、その証言は、例外なく、わたしたちすべてに神の愛を証しするのです。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネ3:16)

ヨハネは、「イエスに愛された弟子」であることを、誇っていたわけではありません。それほど自分は愛を受けているという、気づきと自覚があったのです。

ある人は、自分は愛されていない、愛されたことがない…とつぶやく。そしてその不満足感で、自分のアイデンティティを作り上げ、決して手放そうとしない。そんなわたしたちのために、イエスさまはこの地上に来てくださったのです。語る言葉、をもって、触れる御手をもって、そしていやす奇跡をもって…です。

ヨハネは、イエスさまがこう言われる言葉を紹介します。

-ヨハネ6:35 …「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。

-ヨハネ12:46 「わたしは光としてこの世にきた。それは、わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである。」

ヨハネ自身が、信じることによる人生の変革を経験した人でした。

神さまの愛に圧倒され、その手紙の中で、「神は愛である」(1ヨハネ4:8)という言葉にすべてを言い表そうとしました。それが彼の生涯をかけた証言だったので、す。

ヨハネは、あの十字架の下でイエスが最後に息を引き取るときを見届け、そのことを思い起こすたびに、胸の奥深くに、「神の愛はここにある」という確信を刻みました。彼にとって福音とは、神がどんな方であるかを明らかにする愛の物語でした。それゆえに、復活の朝にイエスを見て、「見て信じた」と記したのです。

十字架と復活を描くこと、神の愛が、何ものにも、死にも損なわれない証です。ヨハネはその証言をもって、「あなたもこの愛を信じ、この命に生きよ」と呼びかけています。

20:31 …これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

### ●おわりに)

初期キリスト教会の歴史。 会堂持たない、もてない迫害下にあった初代教会が、なぜ増え広がったかという問いがありました。

それは、彼らが経験した神の愛と真実があったから。そして「伝道したからだ」とありました。

迫害下で、いのちの危険を冒して、なぜそこまでしたのか？という問いに対して、第一の動機として「神の愛」「神に愛されているから」という動機が記されていたのです。

それは、ひとり子をも下さるほどに、わたしたちを愛してくださった神の愛に動かされたからだというのです。

---

「…彼の（愛されて経験してきた）あかしが真実であることを、わたしたちは知っている。」 (:24)

この言葉は、ヨハネとその時代の人たちだけの声ではありません。福音書を読み、そこに現れるイエスを信じる私たちすべての告白となります。私たちもまた、「主よ、あなたの愛は真実です」と応える者とされています。

ヨハネの福音書は、初めから終わりまで神さまの愛によっておおわれています。「神はそのひとり子を賜った」(3:16)と語られ、最後に「そのあかしは真実である」と結ばれている、素晴らしい証言の福音書なのです。

それは、神の愛が歴史を貫き、今のわたしたちの上にも生きて働いているということです。

「彼のあかしが真実であることを、わたしたちは知っている。」

この“わたしたち”の中に、私たち一人ひとりが含まれています。この証言をもって、わたしたちもそれぞれの生活、生きる現場に遣わされていくのです。